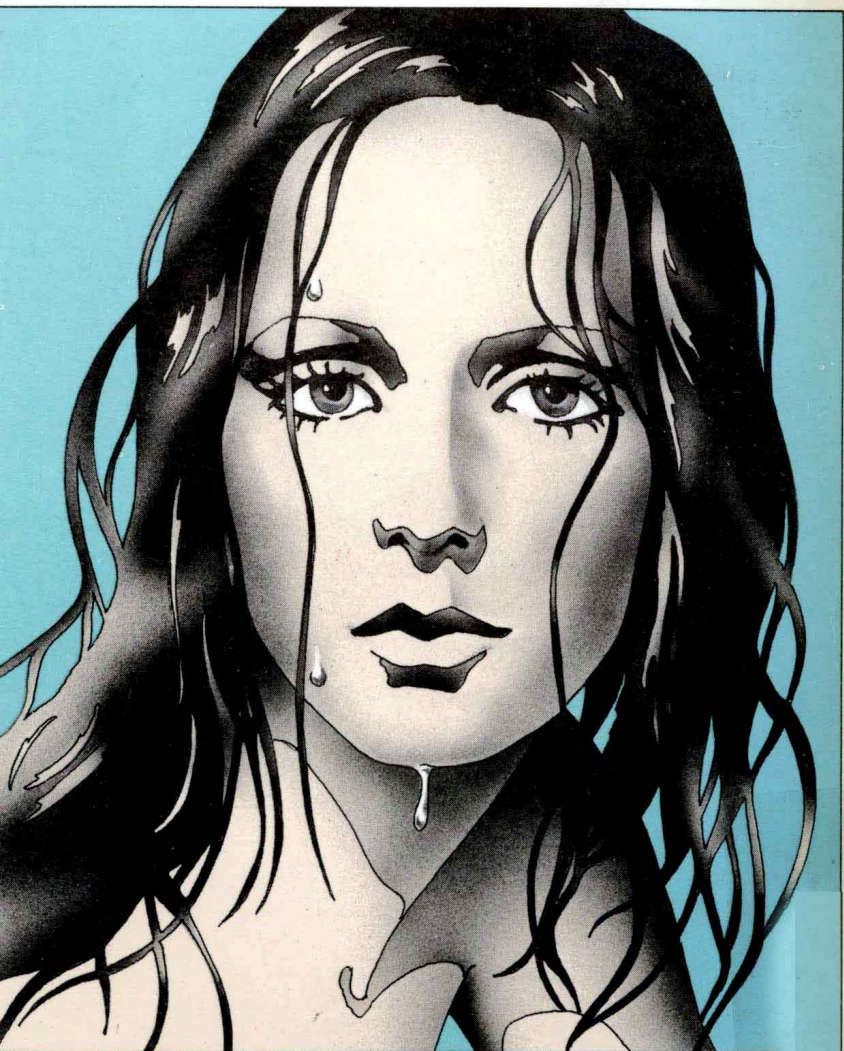


女のロマネスク⑤

晶文社

# 砂の荷物

アンナ・ラングフュス 村上光彦訳



## 訳者について

村上光彦（むらかみ・みつひこ）

1929年佐世保市生まれ。東京大学仏文学科卒業。

現在、成蹊大学文学部教授。

訳書—『ドゴール大戦回顧録』（共訳）、モーリヤック『日記』（共訳）、ロマン・ロラン『戦時の日記』（共訳）、ヴィーゼル『夜』『夜明け』『昼』『幸運の町』、カストロ『マリ=アノトワネット』（以上みすず書房）、ニザノ『九月のクロニクル』、ヴィーゼル『死者の歌』（以上晶文社）ほか。



## 砂の荷物

女のロマネスク⑤

---

1974年4月20日印刷

1974年4月25日発行

著者・アンナ・ラングフェス

訳者・村上光彦

発行者・中村勝哉

発行所・株式会社晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12

電話03-255-4501(代表)4503(編集) 振替東京62799

印刷製本・中央精版印刷 美行製本

ブックデザイン・山口はるみ

©1974年〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

---

女のロマネスク⑤

晶文社

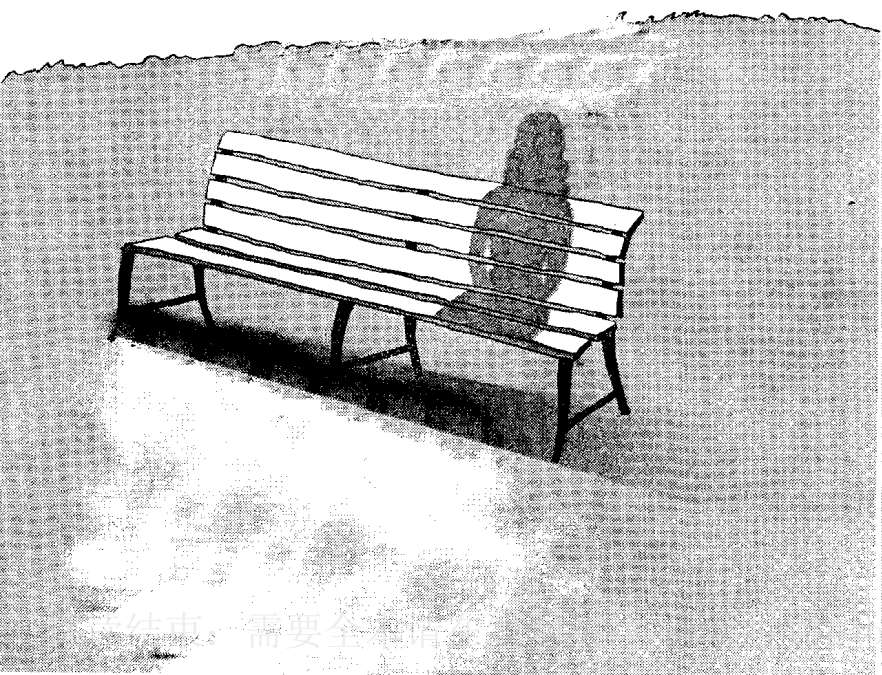
# 砂の荷物

アンナ・ラングフス 村上光彦訳



¥980 晶文社 0097-1305-3091

アンナ・ラングフェス 村上光彦訳



一結束、需要全消行

**Anna Langfus :**  
**LES BAGAGES DE SABLE**  
Original Copyright © 1962  
by Édition Gallimard, Paris  
Japanese Copyright © 1974  
by Shobun-sha Publisher, Tokyo

砂の荷物

この辺鄙な浜辺に、おまえはただひとり辿りつくだろう、  
すると、おまえの砂の荷物のうえに、星がひとつ降りてくるだろう。

アンドレ・ブルトン



階段は広く、赤い絨毯が敷きつめてある。二階まで十九段……。手摺りはひんやりとして、すべすべしている。私の手は、ずっと先のほうへ、出られるだけ先のほうへ伸びて出て手摺りをまさぐり、そして私のからだはいやいややあとからついてゆく。踊り場に立つと、三つ並んだドアのやわらかに黒光りした艶に突きあたる。どのドアもびったりと框に嵌まっけていて、呪文の助けでも借りなければ開きそうにもない。また十九段、そして同じ赤い絨毯を踏むうちに三階に行きつく。ただし、今度は手摺りがいくらか長くなっている。そのあと、手摺りはさらにだいぶ寸が伸びる。そして、手摺りにしがみつくと、ますます重くなる一方の私のからだを隔てる距離が大きくなってゆく。まるで、一段また一段と登るにつれて、体重ひとつ分ずつ重みが加わってゆくかのようにだ。五階に上がりつく少し手前のとこで、降りてくる女の先に通ってもらおうとして、私

は立ち止まる。ほっそりした、黒い服を着た人で、顔は海辺の石のようにすべすべして蒼ざめている。目ははっきり見分けられず、暗い穴が二つあいているようだ。身ごなしは、自分がどこへ行くのか、そしてどういうふうなそこへ行くのか心得ている人らしく、気楽そうに自信に満ちている。私は壁にからだを押しあてる。そして、彼女がまえを通りかかるとき、私はだしぬけに彼女にこう言ってみよう。——「なんとまあ、死がよくお似あいですこと、奥さま。」

もう赤い絨毯はない。一般に赤い絨毯には、建物のずつと上方の階まで行きつく力はめったにないのだ。七階の踊り場に立つと、並んでいるドアの艶は曇り、隙間がずつと広くあいている。これらのドアなら、鍵ひとつあれば開けることができる、私が手に握っているような鍵さえあれば、その鍵は私の手を導き、鍵穴のなかでひとりで回るような感じだ。——鍵が自分で回るに任せて、こちらは黙って待っていさえすればよい。部屋に入ってドアを閉めると、私は「ただいま」と言う。

三人とも薄暗がりについて、二人は椅子に、ひとり私は私の寝台に腰をおろしている。彼らはいっさいの表情の抜け去った顔を私のほうに向ける。——永遠の待機のために用意された仮面を。しかし、そう思って安心してしまっ

らない。彼らの顔の変化はすばやい、おそろしくすばやい。じつにすばやいので、やはり彼らの顔だとわかるのによく、骨を折ることが、私にはときおりある。彼らは三人ともそこにいて、いつまでも私を見つめてばかりいるので、私は「ただいま」と繰り返す。私はハンドバッグを置き、靴を脱ぎ、それから窓を開けにゆく。戸外の熱気が一挙に部屋いっぱい広がる。ねっとりとして、火傷をしそうな練り粉にすっぱり潰かって、そのなかを動き回っているような感じだ。

「また一日無駄にしちゃったわ」と、私は言う。「あいかわらず、なしくずしに日々がなくなつてゆくからね。」

汗のせいで靴下がびったり貼りついていて、私は皮膚を剥がしそうにして靴下を脱ぐ。「放っておいてほしいの！わかること？ 放っておいてよ！」——「そう言うがね、おまえこそこの人たちを追いかけているんだよ」と、父が言う。

父は目を伏せる、恥ずかしがっているようだ。「たとえそのとおりだとしたって」と、私は言う、「だれのせいなのよ？ あなたがた、私のめんどうを見てくださったって？」

——「おまえだってよく知ってるじゃないか……」

しかし、私は勢いづいている。「私はさっぱりなにも知らないわよ。それに、なにも知りたくなかないわ。あな

たがたったら、私を見捨てちゃったじゃないの。もしその気になってくれたら、ずっといっしょにいられたかもしれないのよ。でも、恥ずかしくもなく、卑怯にも、私を見捨てちゃったじゃないの。」

ジャックが顔を向ける。「ぼくたちはいっしょにいるじゃないか。」

私にはそれが彼の声だとは思えないほど、そんなに厳しい声なのだ。そのときになって気がついたのだが、彼はだぶだぶのとっくりセーターを着ている。きつとすごく暑いに違いない。なにか彼にあげようにも、ほかにないないので、私はやさしく、ほとんど囁くようにして言う。——「もちろんよ、私たちがいっしょにいるのね。」

父がいきりたつ。「ここから脱けださなくては」と、彼は繰り返す。「ここから脱けださなくては。」——「いらいらなさらないで」と、ママが言う、「見ればよくわかるでしょ、この子はそのためになにもしないわよ。」——「まあ少しは私の身にもなってよ」と、私は言う。「きつと結構な暮らしだと思うでしょうよ。」

私が明かりを点けると、母が何度も目をしばたいたいでるのが見える。これまで電燈の輝きに慣れきっていたくせに、その強い光がなにをむきだしにして見せたのかいちどきにわかって、それを見ていられなくなった人のようだ。

私は明かりを消して言いわたす。——「私、寝るわよ。」  
息が詰まりそうに暑いのに、私は毛布のなかに潜り込む。  
私は繰り返す。——「私、寝るわよ。」父の声が、昔その  
ままの父の声が聞こえてくる。——「おまえが小さかった  
ころは、どうしても暗い部屋で寝るように慣らしつけられ  
なかったね。——いまでも覚えているが……。」「パパ、お  
願ひよ、私は眠りたいの。とつても疲れているのよ。」す  
るとジャックが、厳しい口調で言う、彼でもこんな声を出  
すとは、私は知らずにいたのだが。——「さあ、ぼくたち  
を眠らせてください、お父さん。」

けさもまた、あいも変わらぬ、もつとも、昼の光に照ら  
されて硬ばったような感じの、あの熱気に包み込まれる。  
それは喉をからからにさせ、心臓をいっそう早く鼓動させ  
る。私は起きあがる、昔からの習慣だから。

いったん戸外に出ると、私は足の赴くままに通りから通  
りへ歩いてゆく。毎日歩き回ってきたくせに、私にはとう  
にどれがどの通りということがわからなくなっている。私  
は黄色く塗った街角のカフェのまえを通る。ここでは、大  
きな赤いパラソルを並べたかげで、男どもが汗の材料を仕  
入れている。私はあの地下の王国に通ずる段々を降りてゆ  
く。その王国は、生者たちが死者たちから捲きあげてしま

って、自分たちの性急な足音や、突きのけあいや、電車の  
轟音に引きちぎられがちな声でいっばいにしているところ  
だ。そして電車は、どこへ行くというわけでもないのに、  
またせわしなく発車してゆく。本来ならそこには、まさし  
く、とうとう行き着いた人たちの沈黙と安らぎとが張りわ  
たっていてしかるべきなのに。白いタイルを張りつめた通  
路を潜り抜けながら、私は壁に触ってひんやりした感触を  
求めようとす。うしろに回した手を引きずるようにして  
歩いてゆくと、しまいに、一枚また一枚とタイルを撫でて  
過ぎるごとに、手のなかいっばいに膨らんでいた熱気がす  
こしずつ置きざりにされてゆくのが感ぜられるにいたる。

ブラットホームに立つと、私は例によつて、大勢のシル  
エットのなかからひとりシルエットを選びだし、そして  
そのあとからついてゆく。もしそのシルエットが立ち止ま  
って、おとなしくじっと立ったまま電車を待っているのだ  
あれば、私はそのかげに立っている。もしそのシルエット  
がじっとしていられなくて、ぶらぶら歩き回るのであれば、  
私もその真似をする。私たちは身ぶりが同じだし、見たと  
ころもそっくりだろうと、私にはたやすく信じられる。そ  
のシルエットが角を曲がるたびに永遠にわたってそのあと  
からついてゆき、その気まぐれのすべてに自分を合わせ、  
私にはとうてい目標のわかりようのない計画にしたがって、

ひとさまの頭のなかにつきつきと生まれでる決定に、私の動作なり不動の姿勢なりを隷従させることだつて、その気になればできそうさだ。しかし、私にはわかつているのだが、遅かれ早かれどこかで扉が閉ざされて、私たちを分け隔てることにならう。私にできるのは、慎ましく、分別をもって、ほんの片端ほどの道だけ、そのシルエットのあとからついてゆくことではない。

電車が着く、私たちは乗る、電車はまた走りだす。腰を掛けるまえに、私はいねいにごめんなさいと言う。それから、私は彼らを見わたす。たいていのばあい、彼らは私を見ていない。——私はすでに別の種族に属しているのだ。ときにだれかがにっこりすると、私の内側に途方もない希望が生まれでる。

私は目を伏せて、膝においたハンドバッグを見やる。そのときすでに、私はきつとこうに違いないと思う。つまり、あの紙切れは今度もまた、私の部屋の机のうえに、はつきり目につくように置いたままになっているのだ、と。あの小さな矩形の紙切れ。私はそこに、できるだけ念を入れた書体で宛名を書きつけておいたのだ。——もう幾日もまえから、私はそれを畳んでハンドバッグに納めたものと自分に言い聞かせようとしてきた。それでいて、私は知っているのだ、これっぽかしの疑いもありえないのだが、私はそ

れを机のうえに置いた瞬間から、それっきり紙切れに手を触れてはいしなないのを。そのくせ、私はハンドバッグを開けて、丹念になかを調べてみる。もうずいぶんまえから、私には自分が想像することと行なうこととの区別がつかなくなっている。あの矩形の紙切れは私の部屋に置いたままになつていて、帰っていくと、もとのところにあるのが目につくだらう。そして私は、あした、書きつけてある宛名のところに出向くだらう。まじめに見えるように口紅をつけないことにするだらう、そして、控えめで育ちのよい少女に似つかわしい微笑みを浮かべて言うだらう。——「家庭教師を求めておいでということなので参りました。」これがじつは遊びなのを、私はだしぬけに悟る。私はいま遊んでいるところなのだ。ずいぶんまえからなのだ、あの紙切れが机のうえに置いたままになっているのは……。あの口は塞がっている、私にもそれはわかつている、そしてそうなれかしと当てにしているのだ。

私があとをつけてきた女のひとが立ちあがる。私も立ちあがる。ドアのまえにきたとき、彼女のすぐそばに立ったものだから、私の手は彼女の花模様ドレスに当たる。私たちは地上に戻ってゆき、そして彼女は行き来の激しい通りを私に横断させる。私たちはとある辻公園に沿って歩き、そしてそこで、私は彼女をやり過ごしてしまふ。

辻公園の小径に入ると、熱気のなかに子どもたちの巻きあげる埃がつまっている。子どもたちは、ゆっくりと、機械じみた動作で、バケツをいっぱいにしてはまた引っくり返しているが、その顔にはなんの表情も見られない。これも無表情なのは、極度の精神集中の表われかもしれないし、あるいはまた、その背後に隠れているのは完全なうつろさなのかもしれない。母親たちはベンチでけなげにも編み物と取り組んでいる。私は少し先まで行って、年配の女の人がひとりで腰掛けているベンチを選ぶ。彼女は私にさっと目を投げかけて、たちまち上から下まで眺めわたす。それから彼女は、うつむいて編み物に没頭し、針のちかちか触れあう音がせわしなく続く。彼女の顔には、目のまわり、鼻のまわりに小皺が網のように広がり、その網目のあいだからばら色の肌や白い肌がのぞいている。「なんて暑いんでしょ」と言って、私は彼女に微笑みかける。また目がさっと走って、私を調べつくす。私は繰り返す。——「なんて暑いんでしょ。息苦しいようですよ。」編み針の動きが止まる。彼女は落ちついて目を数えだす。それから彼女は言う——

「あなたの年ごろなら、息をするのはとても楽なものですよ。病気なら別ですけれど。ご病気ですか。」

彼女は不審げなまなざしを私に注いでいる。

「いいえ、奥さま」と、私はごく口早に言う、「病気ではありませんわ。」

「では、する仕事がないのですね。近ごろはどこに行っても、ぶらぶらしてなにもしない若い人たちを見かけますねえ。」

私は、立ちあがって、去ってゆくこともできるだろうに。だが、留まっている。彼女はそっけない声で尋ねる。

「なぜ働かないのですか。」

この女の人のまえにいと、わけのわからぬ恐怖が胸のうちに滲みこんでくる。私は言う——

「休暇中ですの。」彼女の声はやわらぐ——

「では、ご両親は？ ご両親はどちら？」

「私、みなし児です。」

この単語は私にとっては意味がない。しかしおそらく私は無意識のうちに、この単語に頼って彼女を懐柔しようとしているのだ。孤児に話しかけることは習慣的に決まっただけで、それが世間のつねなものだから、人々は、考えもせずにそのとおりのことを口にするものだ。たぶん彼女もそういう決まり文句をなにか私に言ってくれらるだろう。そうすれば私は、その文句をわがものにして、自分で自分を哀れがためたにそれを使うことができようし、それがうまくいけば、喉を塞いでいるこの塊を首尾よく溶かせるかも

しれない。そう思っていたのだが、彼女はこれだけのことしか言ってくれない。

「それならなおさら働かなくては。ねえあなた、私がみなし児になったときには、いまのあなたより若かったのですよ。それに、妹の世話まで私にかかっていましたね。世話をしなくてはいけない人がだれかいますか。」

「いいえ、だれも。」

「私より運がいいわけですよ。」

私はきつと、弟と妹とを五人育ててくなくてはいけないのだと言うべきだったのだろう。

「私はこれまで仕事しか知りませんでしたよ……。」

そして私は、もう彼女にとっていなくても同然の身となる。彼女の唇から流れ出ることは、もう私に向けられてはいないのだ。

「……子どもたちを育てるためにね。」

彼女は屈みこんで自分の生涯を見おろすうちに、眩暈に負けてしまったのだ。また這いあがってくるには、まだしばらく時間がかかるだろう。

「ひとりきりで、いつもひとりきりで……。」

彼女は仕事しか知らない。これまで仕事しか知らなかったのでふしあわせなのだ。彼女はその仕事を嫌っているくせに、これまで無駄に生きてきたすべての歳月に、いまに

なつてならんかの意味を与えたければ、仕事を美德の地位まで引き上げなくてはならないのだ。私はというと、いまでもできることと言ったら、自分自身に嘘を言い聞かせているこの老婆の話に聞き入りながら、ハンドバッグを膝に載せておとなしくしていることなのだ。彼女にとって、自分で自分を納得させるにはずいぶん時間がかかる。仕事という単語が飽きることなくたち返ってくるが、彼女はしごととの《心》というところを膨らませて、あらゆる隷従に付き物の、勝ち誇りながらも悲嘆にくれた呼びかけのようにこれを顧みさせる。彼女が黙りこむとき、私は突如として、これからの何時間もの時間が恐くなる。それがまだ私の前方に控えていて、もうこの声——そっけなくて復讐心に満ちていながら、まことにふしぎなくらい私の心を鎮めてくれた声——の助けも借りられずに、ひとりでそれと立ち向かわなくてはならないからだ。私は、地べたに置いてある彼女の買い物籠にさつと腕を伸ばし、同時につと立ちあがる。老婆も立ちあがって、私の手から買い物籠をもぎとる。彼女はひとことも口をきかずに私を穴のあくほど見つめる。みんなが私たちのほうに顔を向けて、私たちを見守っているような気がする。彼女がなぜそこに立ったきり冷やかな目で私を吟味しているのか、私にはわけがわからないのだが、その目には私にたいする断罪が読みとられ

る。私は願えながら言う。

「お手伝いのために、これを持っていてさしあげたかったです。」

彼女は丈高く、幅広く、私のまえに突っ立っていて、しかも一瞬ごとに丈はさらに高く、幅はさらに広くなりまざるようだ。彼女はなにか口にするが、私にはその意味が掴めない。私は彼女の腹を見つめる。話しかけている声がそこから洩れ出てくるような感じがするからだ。彼女の腹が世界と私とのあいだに立ちはだかっているからだ。私がそこに身を投げつけたり、拳でそこを殴りつけたりしながら、ただこの老婆を手伝って買い物籠を持っていてあげただけだ、と叫んでみたところで、それは小ゆるぎもしないだろう。そこで、私は黙りこみ、おとなしくしている。辻公園はそこに立ち並ぶベンチや樹木もろとも元どおりの場所に落ちつき、そのあいだに彼女は向こうへ歩いてゆくのだが、途中であるベンチのまえで、つぎにまた別のベンチのまえで立ち止まるのが見え、そしてそのたびに彼女は振り返っては私を指さし、するとあの善男善女が、あいついでくると向きを変えると顔を輝かせて憤激を私に見せつける。立ち去ろうか。ここから出ていこうか。それにはあれだけのベンチ全部のまえをまた通らなくてはなるまい。そこで私は坐りなおし、そして罪人のようにうなだれる。

太陽は、恥と辱めとが固まった、焼けつきそうな球体と  
なって、私の頭上で立ち止まった。大きな赤いボールが小  
径の埃のなかを転がってきて、私の足に当たって止まる。

子どもがゆっくりと、恐るおそる近づいてくるのだが、私  
はそれを拾って渡してやる気になれない。子どもの気配が  
すぐそばまで迫ったとき、私は顔をあげる。子どもはなん  
となくびくびくして、ためらっている。私たちは顔を見あ  
わせる。そのとき、向こうで私たちを見守っているみんな  
の目の呪力が一挙に途絶える。私は身を屈め、ボールを拾  
い、子どもにさし出す。子どもは急がずにそれを手に取り、  
私に微笑みかける。私からそれを取りあげるのを赦しても  
らいたいとも言いたげだ。この微笑みが私の内側に降り  
てきて、胸を痛ませる。私は子どもの手からほとんどポー  
ルを挽ぎ取るようにして、さっきやってきた方角めがけて  
転がしてやる。すると子どもは、ボールを追いかけて笑い  
ながら突進してゆく。本物のボールを追いかける本物の男  
の子。どの辻公園に行っても、遠くに、非常に遠くに大勢  
見られるような男の子のひとり。一時ごろ、辻公園はから  
っぽになる。私はサンドイッチを買いに出てゆき、そして  
同じベンチに戻ってきてそれを食べる。

なぜこうして、来る日も来る日も通りから通りへとあて  
もなくさまよい歩くのか。私がすれ違うこの人たちは、み

んな私のためになができるのだろうか。めいめいがそれ  
その人格で宇宙をいっばいにしている。私は彼らのあと  
からつつましく足を引きずってゆき、行きずりのだれにで  
も、起こりようなない奇蹟を起こしてくれないものかと期  
待をかける。それから、私がたんにこのみじめな檻裡、こ  
のとりとめのない事物だけのものではないのを、私自身に  
むかって証明してみせようとして、私は無理にもこれらの  
存在を憎もうとする。そのくせ私にはよくわかつているの  
だが、私の憎しみは人工的なものであり、それもまた実在  
してはいないのであり、まるで何世紀もまえに見捨てられ  
てしまった廃墟のなかでランプを点すように——この廃墟  
には人が住んでいるのだと信じなければ、そんな仄かな光  
があれば十分だとも言いたげに——その憎しみの火を点  
すのだ。ところで、私にはその憎しみさえ消さずにおくこ  
とができない。ほかのものと同様、私を取り巻いているあ  
らゆるものと同様、その憎しみも私からすり抜けてしまふ。  
私にできることと言えば、奇蹟を探し求めている頭の足り  
ない女らしく、通りから通りへと足を引きずってゆくこと  
でしかない。

サンドイッチは一口食べるごとにますます厄介なしろも  
のになり、私の口のなかで大きく膨れあがつてゆく。——  
窓ガラス用のパテでも噛みしめている感じがする。そして

私は思う。まだ残っているわずかばかりのお金も、やがて  
消えてなくなってしまうだろう。——やがて、ふたたび私  
は空腹になるだろう。結局、私は空腹を当てにしている。  
経験から知っているのだが、空腹というものは気がかりに  
はなるが健康によいもので、つまり、自分の内側になにか  
が潜んでいて、どうすれば払いのけられるかわからないと  
きでも、そんないっさいのものに攻撃をかけて勝利を収め  
られるくらい、その気がかりは遅しいのだ。

「なんともまあ、暑いじゃありませんか。」

私の爪先は動くのをやめ、一個の白い小石をその場に置  
き去りにする。そのとき私の爪先は、すでにできかかって  
いた砂利の小山のほうへ、その白い小石を押しやっ  
ていってしまった。私にはその男が近寄ってくる足音が聞こえ  
なかったのだ。私は不機嫌な目つきをして顔を挙げる。

「返事はすぐでなくていいですよ」と、彼は言う。「息が  
詰まるとたいへんですからね。」

私はサンドイッチの最後の一口をやつとの思いで嚙みく  
だす。

「向こうに行ってくださいな」と、私は機械じみた口調で  
言う。

彼は私のそばに腰をおろす。

「いえね、二時間暇潰しをしなければいけなくなりまして



ね、退屈しているんですよ。別に思惑があつてのことではないのです。」

私の足もとで砂利の小山が崩れ落ちる。

「あなたの退屈など、私には興味がありませんわ」と、私は言う。「それに、あなたが思つていらつしやることだつて。」

しかし、彼がそばにいても構わないと私が思つてゐるのを、彼はすでに悟つてしまつていた。

「わかりましたよ」と、彼は言う、「そうおっしゃるあなたも、やはり物思う少女なんですね。」

返事が戻つてきて、からかい好きの心にまた弾みがつくようにと、彼は待ち受けてゐるのだ。彼は自分のそうした心から、なんらかの満足を得てゐるのに違ひない。彼はとても若く、自信ありげな様子だが、それは実体が薄くて、むしろ見せかけの自信なのだ。私はふと彼の手の動きに気づく。それはベンチのうえを私のほうへ匍い出ようと努めながら、なにか目に見えない障壁を越すに越されなくて力尽きかけてゐるのだ。何度か企てて徒勞に終わったすえに——私は見ながら知らぬ振りをしてゐる——彼は手を引つこめる。私は砂利の山を築きなおす仕事にとりかかると、彼は言

「やっぱり退散するほうがよさそうですね」と、彼は言う。「お邪魔したくありませんから。」

「あら、構いませんわ」と、私は礼儀正しく言う、「いっこう邪魔など思つていませんのよ。」

「奇妙なお嬢さんですねえ。」

初めのうちの自信はもうあとかたもない。私たちは長いあいだ黙つてゐる。

「なにか冷たいものでも飲みにいきませんか」と、彼はとうとう言ひだす。私は立ちあがつて、彼のあとからついてゆく。

彼が私と向かいあつて腰をおろしたいま、私は注意ぶかく彼を見定める。短く刈つた暗い色の髪の毛、切れ長の美しい眼、大きい日焼けした手でコップを包みこみ、そのコップのひんやりした感触を少しでも逃がすまいと細目に開けてゐる口。私たちが言い交わすことばは、初めはいきあたりばったりで、意味もなく、ぼつと口にしては長い沈黙が続き、浅瀬を徒渉ちちわたりするために流れに置いた石のように私たちのあいだに投げ出されたのだが、そのうち少しずつたがいに関連ができ、秩序だつていつて、私たちはしほいに本格的な会話に入つてゆく。ただもういっしょにゐるだけでしあわせな二人の若者どうしにふさわしく、熱心でありながら同時にゆとりのある会話だ。私たちは薄荷水をとくさん飲んだ。

「あしたもまたお目にかかれるでしょうか。」